

学位（博士）論文要旨

科学的社会学の挑戦と挫折

第一次世界大戦後の米国における社会的なものの再生
の系譜

Re-creating the Social:

*Challenge and Defeat of Scientific Sociology Following the WWI
years*

吉田耕平

目次

序章 起源の神話

第一部 理論の構想

第一章 はじめに

第二章 総合の科学——C・A・エルウッド

第三章 科学の本義——R・M・マッキーヴァー

第四章 新しい科学——P・A・ソローキン

第五章 分析と知見

第二部 調査の構想

第一章 はじめに

第二章 科学との離別——R・E・パーク

第三章 科学への固執——L・L・バーナード

第四章 科学への幻滅——W・F・オグバーン

第五章 分析と知見

終章 神話の起源

概要

本論文では、一度目の世界大戦と社会学の関係について、ある世代

を取り上げて分析を行った。6名の事例を取り上げ、戦争への関与を通じて、社会学者がどういった思想を抱くことになったかを検討した。その結果、第一次大戦が社会学思想に与えたインパクトは、既往の研究で想定されていたのと非常に異なっていたことが明らかになった。

最も重要なのは、戦時期に、「社会的なものを再生させる」という目的意識が社会学に浸透したことだ。その狙いを達成するためにこそ、1920年代には、「科学的な方法を用いる」ことが必要だと唱えられたのだ。ところが、1930年代になると、「科学的な方法を用いよ」というスローガンは、破棄される。大恐慌とニューディール、ファシズムとナチズムの時代に、科学の手続きは悠長にすぎる、とされたのだ。先の総力戦が産み落としたのは、まずは科学的社会学の〈挑戦〉、そしてその〈挫折〉だった。

本論文の第一の作業は、既往の歴史像が何を誤ったのかを吟味することだった。従来、歴史家たちは、一連の予断を抱き続けてきた。「科学的」と言えば経験的調査に基づく学問を指したであろう。それは誇大な狙いを持たずに科学的「方法」に専念したであろう。というのがそれだ。ここで閉ざされていたのは、次の問いである。「科学的」という語は、ほんとうに、誰にとっても同じことを指していたのだろうか？ その「科学的」方法は、ほんとうに、壮大な「社会的」目的と無縁であると考えられたのだろうか？（序章）

続く作業は、この過程を実証的に跡付けることだった。そのために、6名の社会学者それぞれの30年間を辿った。理論家としては、C. A. エルウッド (1873-1946)、R. M. マッキーヴァー (1882-1970)、P. A. ソローキン (1889-1968)。調査家としては、R. E. パーク (1864-1944)、L. L. バーナード (1881-1951)、W. F. オグバーン (1864-1944)。この人たちは、第一次大戦が終わると素早く頭角を現し、ともに「科学的社会学」の爆発を担った。だが、それは第二次大戦を過ぎると忘却されていた。第一次大戦の〈戦後〉に何が起こったのか。

社会学的な理論を重視していたエルウッド、マッキーヴァー、ソローキンに関しては、次のことが浮かび上がった。彼らは通説に反して、

懸命に「科学的社会学」を追究していた。戦時と戦後、人々はばらばらな社会的理念を持つようになった。理念の共有をはかるためには、「科学的な理論」の体系が重要である。この体系を学んだ人々なら、共通の感性を抱き、価値の共有を担うことができるはずだ。こう考えた彼ら三名の構想は、しかし、もっと具体的な貢献を求められるようになって破棄される。大恐慌とファシズムに見舞われた1930年代、科学的であることに囚われていられなくなったのだ（第一部）。

社会学的な調査を重視していたパーク、バーナード、オグバーンについても、通説に反する事実が認められた。彼らの「科学的社会学」は、あくまでも共通の目的を形成させようとする試みだった。戦時と戦後、人々はそれぞれに根深い偏見を抱えるようになった。人々が自らの認識を改めるには、「科学的な調査」の報告が必要である。この報告を見た人なら、対立する立場への不信を取り払い、共通の行動をとることができるはずだ。こう考えた彼ら三名の調査構想は、しかし、高望みにすぎたとして断念されてしまう。大恐慌とファシズムの深刻さが露呈した1930年代、科学的であることに大した力を期待できなくなったのだ（第二部）。

最後の作業は、以上の過程に系譜学的な逆説を見出すことだった。科学的社会学の「起源」の神話には、それ自体の起源があった。科学的社会学が「通常科学」化したとすれば、それは1920年代の野望のゆえではなく、1930年代の敗北のゆえであった。科学的社会学を爆発させた世代が、科学的方法の効用を疑い始めていく。後続世代は、逆に社会的目的の形成など思いつきもしなくなる。総力戦が求めた目的形成は、自覚されない所与の課題となった。社会学者は、これを担い続けることになった（終章）。

課題

本研究に続き、筆者は後続世代の研究に取り組んでいる。だが、それは本文その他で触れている。ここでは、教室内審査（2013年1月22

日等)や有志合評会(同年5月25日)で出された課題に触れたい。

まず、基本的な枠組みに関して、「総力戦」の理論と実態について、筆者はどう考えているのか。「調査」と「理論」の関連について、当時の社会学者はどう考えていたか。筆者自身の立ち位置は、どこにあるのか。1920年代的な「科学的」社会学にコミットしたいのか、1930年代的な非「科学的」社会学にコミットしたいのか(以上審査員より)。

次に、論文の意義付けについて、次のような議論はできないのか。

「1920年代は第1次大戦の「戦後」、1945～1950年代前半は第2次大戦の「戦後」、1989～1997年は冷戦体制の「戦後」という共通性があるように見える。……これが思想史的な反復とどのように関連していたのか。」また、「科学による国民化」という主題が、ビスマルク体制下のプロイセンを考察したヴェーバーにおいて既に一度提示されていることに、明確に触れておいた方が良かった。」(審査員講評より)

さらに、論証の手続きについて、当時、「調査」「理論」「科学的」がどういう意味で用いられていたのか。また、「6名の学者たち……に対する「第一次世界大戦」や「大恐慌と全体主義」による直接の影響[は認められるのか](彼ら自身がそれをどう体験し、またどう語っているのか)。(評者＝神戸大学の梅村麦生氏より)

最後に、比較史的な含意について、「スペンサー主義が普及し個人主義が強かったアメリカとは異なり、ある意味ではフランスですでに共通の理念や社会的なものがある程度存在していた」のではないか。また、仏国と異なり、米国の社会学者は「牧師か牧師の家庭の子弟だった。……この社会学者たちこそ……新たな信仰の対象たる共通の理念、目的、価値を導き出せないか七転八倒した結果という側面もあったのではないか」(評者＝首都大学の高橋章子氏より)

部分的には本文の中で論じているものもあるが、いずれ稿を改めて論じたい。末尾になったが、ここで審査員と評者の先生方、合評会を開いていただいた本会運営委員の皆さまに謝意を表したい。

(よしだ こうへい・首都大学東京客員研究員/
関西大学非常勤研究員)